

第 108 回 ごみ収集パイプライン利用者の会 議事録

日時	2026年7月30日 19:30～20:35
場所	芦屋浜 センタービル3F 会議室
参加者(敬称略)	ごみ収集パイプライン利用者の会 長尾・大山(アステム D 棟)、友田・下木(アステム C 棟)、森(芦屋浜第1住宅)、田村(浜風町第3街区)、保田(浜風町第4住宅)、北中(浜風町第5住宅)、谷野・末友(新浜町住宅)、三浦・池西・小谷(ラ・ヴェール芦屋Ⅱ)、松木(ラ・ヴェール芦屋Ⅲ)、山口(アステム A・B 棟)、井上・中村(芦屋浜第2住宅)、小林(緑第西区)、池田(緑第二住宅)、西川(緑第四住宅)、向井(潮見第二住宅)、春木(南浜1街区)、寺前(市議)、川島(市議) 芦屋市環境施設課 尾川・畑・林 合計26名
議題	1. 芦屋市環境施設課 尾川課長による説明 現在のパイプラインの運転状況について 実証実験の概要と今後の予定 2. 生ごみ減量への取り組み

テーマ 1 パイプライン運転停止の現状と復旧状況

【説明】

芦屋市環境施設課より、現在のパイプライン運転停止の原因と復旧作業の状況について説明が行われた。

令和 8 年 6 月 25 日から 26 日にかけて約 157mm の集中豪雨が発生し、芦屋浜全体の地下水位が急激に上昇した。その結果、老朽化した配管や地下ピットの隙間から大量の地下水が管路内へ浸入し、ごみと水が混ざることで重量が増加し、通常の吸引運転ができなくなった。

このため、市では配管の閉塞を防止するため、早朝の自動運転を停止し、職員が毎日排水ポンプによる排水作業を継続している。しかし、翌日には再び地下水が流入し満水状態となるため、全面復旧には至っていない状況である。

現在は臨時収集(月～土の週 6 回)に切り替えて対応しており、一部地域では地下水位の低下により試験運転が始まっている。アステム A・B 棟、若葉町などでは復旧の見込みが立ち始めているが、西側地域では依然として厳しい状況が続いている。

市からは、「今後も地下水位が十分に下がるまで排水作業を継続し、順次通常運転へ復旧させる」との説明があった。

【Q&A】

Q1 今回はごみ詰まりではなく、水だけが原因なのか。

A 今回は配管内への地下水の流入が主な原因であり、ごみ詰まりではない。早朝運転を停止したことで、ごみと水が混ざって閉塞することは防止できている。

Q2 今回の対応にはどの程度の費用がかかっているのか。

A 現在の臨時収集には約 1 日 10 万円の費用がかかっている。現時点では高圧洗浄車などによる閉塞除去作業は必要なく、それらの高額な費用は発生していない。

Q3 青ランプになった場合は、ごみを投入してよいのか。

A 青ランプは試験運転中の場合があるため、市から正式に「復旧」の案内があるまでは投入しないようお願いしたい。

Q4 今回のような豪雨が今後も発生すると、同様の停止が起こる可能性はあるのか。

A 地下水位が大きく上昇する豪雨では、同様の現象が発生する可能性がある。老朽化した配管の補修を進めながら対応していく。

【結論】

- ・運転停止の原因は地下水の大量流入であり、ごみ詰まりではない。
- ・全面復旧まで引き続き排水作業を継続する。
- ・復旧は地域ごとに順次進める。
- ・利用者は市から正式な復旧連絡があるまでパイプラインを使用しない。
- ・復旧時期については地下水位の低下状況に左右されるため現時点では未定であるが、住民への情報提供については、より分かりやすい方法を検討していくこととなった。

【NEXT ACTION】

- ・ 地下水排水作業の継続
- ・ 復旧可能地域から順次通常運転へ移行
- ・ 復旧状況をホームページ・掲示等で周知(芦屋市とのワーキンググループで検討)

テーマ 2 運転停止時の情報提供・住民への周知方法

【説明】

運転停止が 1 か月以上続く中、住民への情報提供のあり方について活発な意見交換が行われた。

参加者からは、「住民が最も知りたいのは復旧時期であり、現在どのような作業を行っているのかが十分伝わっていない」「市ホームページの内容が長期間更新されておらず、進捗状況が分かりにくい」との意見が出された。

また、「地下水が流入している写真や復旧作業の状況を公開すれば、住民も現状を理解しやすくなる」「復旧した地域については、ホームページだけでなく掲示板や管理組合、自治会などを通じて迅速に情報提供してほしい」との要望も出された。

市からは、ホームページや利用者の会への情報提供は行っているものの、住民への伝達方法については改善の余地があるとの認識が示され、今後情報発信の方法を見直す考えが示された。

【Q&A】

Q1 復旧時にはどのような方法で住民へ連絡するのか。

A ホームページへの掲載、利用者の会への連絡、ネット・コーンの撤去などにより周知しているが、さらに分かりやすい方法について検討する。

Q2 芦屋市ホームページなどで、輸送管内へ地下水が流入している写真や作業状況を公開した方が、住民に現状が伝わるのではないか。

A 参加者からは、「運転停止が長期間続いているため、住民は原因や復旧作業の状況を十分理解できていない。写真などを活用して分かりやすく情報発信すべき」との意見が出された。これに対し市は、「現在は停止情報や復旧状況をホームページ等で発信しているが、写真を含めた情報提供については今後検討したい」と回答した。

Q3 住民が一番知りたいのは「いつ復旧するのか」だが、復旧時期は分からないのか。

A 市からは、「復旧時期は地下水位がどの程度下がるかに左右されるため、現時点で明確な日程を示すことはできない」との説明があった。一方で、一部地域では試験運転が始まっており、復旧可能な地域から順次通常運転へ切り替えていく予定であるとの説明があった。

Q4 自治会・管理組合への情報伝達を強化できないか。

A 利用者の会や自治会との連携をさらに強化し、より確実な情報共有方法を検討する。

【結論】

- ・住民への情報提供は改善が必要であるとの認識を共有した。
- ・ホームページだけでなく、掲示板や自治会・管理組合など複数の媒体を活用した情報発信を検討する。
- ・復旧状況が分かる情報を継続的に発信する。

【NEXT ACTION】

- ・ 情報発信方法の見直し
- ・ 復旧状況の定期的な更新
- ・ 管理組合・自治会との情報共有体制の強化
- ・ 利用者の会ワーキンググループで情報伝達方法を整理する

テーマ 3 パイプライン代替収集方法の実証実験

【説明】

芦屋市から、パイプライン設備は老朽化に伴い、条例により使用期限が定められていることが改めて説明された。芦屋浜地区は令和 20 年度、南芦屋浜地区は令和 32 年度を目途にパイプラインの運用を終了する予定であり、その後のごみ収集方法を早期に決定する必要がある。

市では、これまで利用者の会やワーキンググループと協議を重ね、住宅形態(高層・中層・タウンハウス・戸建)の違いを考慮し、それぞれに適した収集方法を検討してきた。

その結果、令和 8 年 8 月 17 日から実証実験(モニター)を開始することとなった。

実証実験では、高層住宅(アステム A・B 棟)、中層住宅(ラ・ベール 2・3)、タウンハウス(浜風町 3)、戸建住宅(緑町)を対象に、それぞれ 3 種類の収集方法を約 1 か月ごとに切り替えながら試験運用を行う。

検証する方式は、

- 集合カート方式
- 金網ごみ庫＋カート方式
- 金網ごみ庫方式
- 折りたたみネットカゴ方式
- 金属ボックス方式
- カート収納ボックス方式

などであり、実際の使い勝手、管理のしやすさ、景観、カラス対策、維持管理の負担などを総合的に評価する。

実証実験終了後はアンケートを実施し、利用者の意見を反映しながら、将来の標準的なごみ収集方法を決定する資料として活用することが説明された。

【Q&A】

Q1 なぜ住宅形態ごとに異なる収集方法を試すのか。

A 高層住宅、中層住宅、タウンハウス、戸建住宅では、ごみ排出量や利用環境が大きく異なるため、それぞれに最適な収集方法を選定する必要がある。

Q2 実証実験はどのように評価するのか。

A 利用者アンケートを実施し、使いやすさ、清掃の負担、景観、安全性、カラス対策などを総合的に評価する。また、運営上の問題点も整理し、改善できるものは改善していく。

Q3 収集回数はどのようになるのか。

A 実証実験では「週 3 回(月・水・金)の収集」を予定している。収集場所や必要容量を考慮すると、現時点では週 3 回が最も現実的であると説明された。

Q4 高層住宅ではごみの量が多いが、週 3 回の収集で対応できるのか。

A まずは実証実験で実際の排出量を確認する。収集能力や運営方法に課題があれば改善し、将来の収集方法へ反映させる。

Q5 収集後の臭いや清掃はどのように考えているのか。

A 基本的には午前中の収集を予定している。カート等の簡単な水洗いなど一定の維持管理は必要となるが、その負担も実証実験の評価項目として検証する。

Q6 30～50cm の「その他燃やすごみ」はどうなるのか。

A 金属ボックスやネット方式などでは通常の可燃ごみと一緒に排出できるため、現在のような月 1 回の「その他燃やすごみ」の収集は不要となる。ただし、カート収納ボックス方式では投入口の大きさによる制約があるため、今後詳細を確認していく。

Q7 他都市での導入事例も参考にできないか。

A 西宮市や神戸市などで導入されている事例も参考にしながら、実際の運用状況を確認し、芦屋浜に最も適した方式を検討していく。

【結論】

- ・令和 8 年 8 月 17 日から住宅形態別の実証実験を開始する。
- ・実際の運用結果と利用者アンケートを基に、将来の標準的な収集方法を決定する。
- ・景観、安全性、維持管理、利便性などを総合的に評価する。

【NEXT ACTION】

- ・ 8 月 17 日から各地区で実証実験を開始する。
- ・ 各方式の問題点・改善点を記録する。
- ・ 利用者アンケートを実施する。
- ・ 実証結果をワーキンググループで分析し、今後の収集方式に反映する。

テーマ 4 生ごみ減量実験(家庭用生ごみ処理機)

【説明】

利用者の会から、家庭から排出される生ごみを減らすための取組として、家庭用生ごみ処理機を実際に 1 か月間使用した結果が報告された。

使用した機器は、市販されている比較的安価な温風乾燥式生ごみ処理機(約 2 万円)である。

実験では、コーヒーかすや茶殻など日常の生ごみを処理した結果、生ごみ重量は約 45% 減少した。また、運転時間は約 8 時間、電気代は 1 回約 31 円であった。

芦屋市の家庭ごみ排出量は 1 人 1 日約 886g であり、この処理機を利用することで家庭全体のごみ量を約 23% 削減できる可能性があることが紹介された。

さらに、使用した感想として、

- ・ 運転音はほとんど気にならない。

- ・ 活性炭フィルターにより臭いもほとんど感じない。
- ・ 家庭でも十分実用的に使用できる。

との報告があった。

次回(9月)の利用者の会では、生ごみ減量をテーマにワークショップを開催し、参加者同士で実践事例や新たなアイデアを共有する予定である。

【Q&A】

Q1 実際にどの程度ごみは減ったのか。

A 約1か月の実験では、生ごみ重量は約45%減少し、家庭全体のごみ量では約23%削減できる結果となった。

Q2 電気代や運転音は気にならないのか。

A 1回約8時間運転して電気代は約31円程度であり、運転音や臭いもほとんど気にならなかった。

Q3 芦屋市では購入補助制度はあるのか。

A 現在、芦屋市には補助制度はないが、他自治体では購入費の半額補助を実施している例もあることが紹介された。

Q4 次回はどのような内容を予定しているのか。

A 参加者同士が生ごみ減量の工夫や実践例を持ち寄り、意見交換を行うワークショップを開催する予定である。

【結論】

- ・家庭用生ごみ処理機は、ごみ減量に一定の効果があることが確認された。
- ・家庭から排出される生ごみ削減は、ごみ全体の減量にも大きく貢献する。
- ・今後は住民同士が実践例を共有しながら、生ごみ減量を地域全体へ広げていく。

【NEXT ACTION】

- ・ 9月24日の利用者の会で生ごみ減量ワークショップを開催する。
- ・ 参加者が実践している取組や新たなアイデアを共有する。
- ・ 家庭で実践可能な減量方法を整理し、住民への普及を進める。
- ・ 生ごみ減量によるごみ排出量削減効果を継続して検証する。

以上

作成：山口能成